

## 研究論文

## 大阪府粟生間谷遺跡の石材利用

三好元樹

## 要旨

大阪平野北部に位置する粟生間谷遺跡は近畿地方の編年研究で重要な役割を果たす遺跡である。2000年代を中心とした石器石材研究の一つの到達点といえる「時期別石材組成グラフ」から、さらに検討を進める方法として、石器全点の最大長によるヒストグラムを用いることを提起し、その方法で粟生間谷遺跡について検討することとした。粟生間谷遺跡ではブロック1・3・6で遺物がまとまっているが、チャートの使用が一定量あるブロック1とブロック6を分析対象とした。ブロック1では、ナイフ形石器、剥片、石核とともにサヌカイトとチャートの違いが少ない。サヌカイトが比較的乏しくなっていることふまると、技術を変えることなくチャートによる石器製作に移り変わっているものと捉えられる。ブロック6ではサヌカイトではナイフ形石器の大きさが大型と小形に別れ、チャートには小形の中でも最も小さい範囲のナイフ形石器しか存在しない。剥片の大きさもサヌカイトに比べてチャートは小さく、石核はサヌカイトが剥片を素材とするのに対して、チャートは分割礫を素材とする傾向があり、剥片剥離の方法自体が異なるものとなっている。チャートはサヌカイトの代替石材とはなっておらず、製品の小さい部分を補助しているに過ぎない。同じ遺跡内でおそらく石材の分布環境にも大きな違いがなかったと考えられる2つのブロックで石器製作が異なった要因は、時間的な差異とそれに伴う技術構造の違いと考えられる。ブロック6は国府石器群に近い段階の石器群と考えられ、サヌカイトを中心とした技術構造があり、補助的にチャートが利用された状況を示している。それに対して、ブロック1では石材で技術、製品に差異が少なく、国府石器群とは異なる段階の石器群と評価できる。

キーワード：対象時代 旧石器時代

対象地域 大阪府箕面市粟生間谷遺跡

研究対象 石器石材・出土石器全点・石器の最大長

## はじめに

石器石材は、旧石器時代研究における主要な研究テーマの一つである。大阪平野ではサヌカイトが使用石材の主体となるが、その北部ではチャートが産出することもあり、チャートを併用する石器群が知られている。本論では、石材利用の分析方法を検討するとともに、大阪府粟生間谷遺跡を対象として石材利用について考える。

### 1. 粟生間谷遺跡の概要とこれまでの研究

粟生間谷遺跡は大阪府箕面市に所在する。淀川北岸の、北摂山地の南に隣接する丘陵上に立地する。都市開発に伴い、1994～2000年に発掘調査が行われ、発掘調査途中で旧石器時代のブロックの存在が明らかになり、その調査が行われた。2003年に報告書が刊行された（新海編 2003）。

発掘調査では7つのブロックが確認され、特にブロック1・3・6では遺物がまとまって出土した（以下、ブ

ロック1・3・6とするものは粟生間谷遺跡のもの）。報告書作成には、当時の新進気鋭の研究者が多数携わり、多様な分析がなされた。一方で、編年的な評価は保留され、火山灰分析の結果をもとに、ブロック6がブロック3に先行する可能性を示すにとどまった。

その後、粟生間谷遺跡の石器群は、近畿地方の旧石器時代編年の主要な要素として取り上げられていくこととなる。

最初の編年的な評価は伊藤栄二によってなされた。粟生間谷遺跡の石器群をひとまとめにしつつ、従来、国府石器群に後行すると考えられていた宮田山期に相当する石器群と評価し、国府石器群に先行して位置付ける「逆転編年」を提示した（伊藤 2003）。

森先一貴は、小形柳葉形のナイフ形石器がまとまるブロック1を国府石器群成立の前段階に、ブロック3・6を国府石器群の段階と評価した（森先 2005）。粟生間谷遺跡のブロックを個別に評価し、それぞれを編年上に位置付けた重要な成果であった。後には、ブロッ

ク1を七日市遺跡第IV文化層と共に通すると考え南関東のVI層並行期に、ブロック3をV層並行期に、ブロック6をIV層下部並行期に位置付けている（森先2010）。

藤野次史はブロック6を国府石器群と同じ第IIb期に、ブロック1をナイフ形石器終末期の第III期後半に位置付けた（藤野2006）。ブロック1の位置付けが森先とは大きく異なる。

佐藤良二・絹川一徳は、ブロック3・6を国府石器群に後続する第四段階に、ブロック1を終末期の第五段階に位置付けた（佐藤・絹川2010）。ブロック3・6をともに国府石器群に後続する段階に置く点が特徴である。ブロック3・6については、久保弘幸も国府石器群に後続し、瀬戸内技法の比率が相対的に低下するIIb期に位置付ける編年を示している（久保2014）。なお、後に絹川は、ブロック3・6を国府石器群と重複しつつ、より後の段階まで継続する後半1期II群に位置づけ直している（絹川2013）。

森川実はAT降灰以降の石器群を検討する中で、ブロック3を国府石器群に先行するIb群に、ブロック6を国府石器群を含むII群に位置付けている（森川2011）。

筆者はブロック6を角錐状石器が伴う5期に、ブロック3を横長剥片を素材とするナイフ形石器が主体となる6期に、ブロック1をナイフ形石器の終末期の7期に置いた（三好2014）。

このように粟生間谷遺跡の編年的な位置付けは極めて多様である。ブロック1は、森先が国府石器群に先行する段階に、そのほかがナイフ形石器の終末期に位置付ける。ブロック3は、森川が国府石器群に先行する段階に、森先が国府石器群の段階に、佐藤・絹川、久保、三好が国府石器群に後続する段階に位置付けている。ブロック6は、佐藤・絹川、久保が国府石器群に後続する段階に、その他が国府石器群あるいは瀬戸内技法を有しながら角錐状石器を伴う段階に位置付けている。このように編年位置付けが様々であるのは近畿地方の編年が一致していないことによるものであり、当面はこの状況は解決しなさそうである。

こうした編年研究の一方で、報告書以降、石器群の内容について検討した研究は多くない。その中で森先によるチャート利用についての検討は重要である。森先は、大阪平野周辺のAT降灰以降の遺跡を対象に分析を行い、チャートを多く含むI類とチャートが少ないII類に分類する。ブロック1とブロック6をI類に、ブロック3をII類に位置付けた。I類においてはチャートとサヌカイトで石器製作に大きな違いがない

とした（森先2004）。

こうした研究をふまえつつ、本論では次章で示す方法で粟生間谷遺跡の石材利用を再検討したい。

## 2. 石器石材利用の分析方法

石器石材への着目は、日本の旧石器時代研究の初期から重要な役割を果たしてきたが、特に2000年代を席巻することとなった。これは1994年以降活発化した、蛍光X線による黒曜石の産地推定（望月ほか1994）が普及したことによると加え、関東地方の悉皆的な石材調査（田村ほか2004など）が成果を上げたことで、客観的な分析が可能と認識されたことが大きな要因であろう。1990年代に盛行した文化人類学などのモデルを適用した理論考古学は科学を志向したが、科学的であることは限界があり、次第に石材研究をはじめとする客観的な分析に取って代わられた（三好2024）。

2000年代を中心とした石器石材研究の一つの到達点は、特定の地域内の主要な遺跡を時期別に並べ、石器全点の石材の割合を百分率で示した「時期別石材組成グラフ」であった。具体的には、愛鷹山麓（池谷・望月1998）、相模野台地（諏訪間2006）、中国山地（藤野2013、及川・灘2018）などが挙げられる。

点数という客観的な属性をもとに作成された「時期別石材組成グラフ」は、地域の段階的な変化の大枠を把握するには極めて有効であった。これをもとに人々の活動の範囲やルートを分かりやすく示した成果は今でも有効である。

その一方で、「時期別石材組成グラフ」は単純に1点ごとの石材の組成を示すものであり、抜け落ちる属性は少なくない。今後の石材利用の研究では、「時期別石材組成グラフ」で明らかになったことをもとに、そこから抜け落ちた属性を拾い上げて、詳細を検討していく作業が必要となると考えられる。

ここでは「時期別石材組成グラフ」がかかえる課題の1つとして、石器の大小や器種に関わらず1点として捉えることを挙げたい。小片と石核や大型の剥片を同等に扱わざるをえなかつことにより抜け落ちた要素はあるようと思われる。大きさだけであれば、点数の「時期別石材組成グラフ」とともに、重量によるものを加えればある程度の問題の解消は見込めるだろう。だが、器種間の関係性までとなると難しい。

そこを検討可能とする方法として、ここでは石器の「最大長」を属性としてヒストグラムで示す方法を試みたい。ここで言う石器の最大長とは、石器の最も長くなる部位の長さである。実際に個々の石器を計測し

て求める必要があるが、作業の手間を省くため、報告書に掲載されている観察表を利用することとした。観察表には長さ、幅、厚さが掲載されているものが多く、その中で最大となるものを「最大長」とする。報告書に掲載されている観察表は、一般的には基軸や剥離軸を基準として計測した長さ、幅、厚さが示される。それと実際の最大長の間に差異はあるが、極端な違いが出ることは少ないと考え、この方法によることとした。

石器の最大長を基準とするのは、ナイフ形石器石器群の場合、石器の素材として剥片を選択する際に大きな役割を果たしていたと考えられるためである。西南日本のナイフ形石器石器群においては、よく見られる製品は、ナイフ形石器、削器、搔器、ノッチ、錐などに限定される。ナイフ形石器や削器の製作については、剥片の最大長を意図的に減ずることなく、最大長を生かす方向でなされることが一般的である。

もちろん、剥片を製品に加工するかどうかの判断には、例えばナイフ形石器の場合、刃部として利用できそうな鋭い縁辺が残されているかどうかなどの個別の剥片の特徴が影響したことは間違いない。だが、そうした判断は個々の剥片を実見し、主観的に判断しなくてはならない。悉皆的な検討は容易ではないため、ここではあくまでも最大長により検討を進めることとする。また、剥片の厚さが製品の素材としての選択に影響したことは想定される。今回は取り扱うことができなかったが、今後取り組みたいと考えている。

こうした理由から、本論では石器の最大長を用いて検討を行うが、ヒストグラムを作成して可視化する。縦横に軸を持つ散布図では、一般的に漠然とその多寡を感じられるに過ぎない。ヒストグラムを用いると分布の形の認識が容易である（石井 2020）。

筆者は同様の方法で、大阪府翠鳥園遺跡の旧石器時代資料について検討した（三好（印刷中））が、そこでは石材ごとの差異については検討はできなかった。本論では粟生間谷遺跡のブロックについて石材利用とい

う視点で検討したい。

### 3. 粟生間谷遺跡ブロック 1・3・6 の使用石材

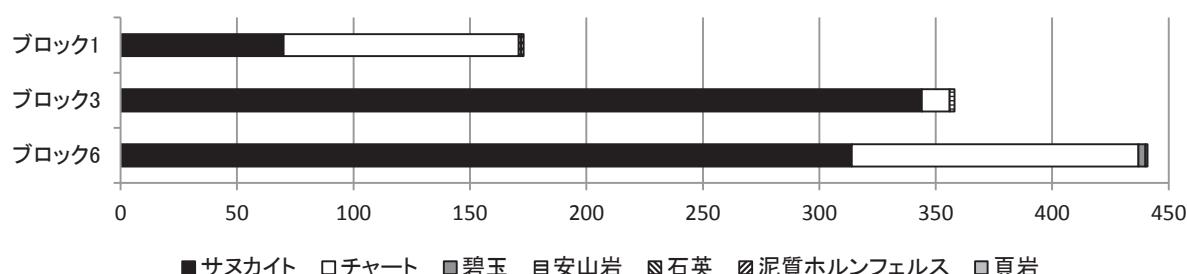
まず、ブロック 1・3・6 の使用石材について確認する。第 1 図は出土石器のうち碎片を除いた石器全点の石材を示したものである。ブロック 1 に石英と泥質ホルンフェルスが 1 点ずつ、ブロック 3 に安山岩が 2 点、ブロック 6 に碧玉が 3 点、頁岩が 1 点含まれる以外は全てサヌカイトとチャートとなっている。ブロック 3 ではサヌカイトが大多数を占め、チャートは 12 点と少数である。

ブロック 1 はそもそも点数が少ないが、これはブロック 1 の大多数を占める碎片が除かれているからである。サヌカイトよりチャートが若干多い組成となる。ブロック 6 はサヌカイトが主となり、チャートは客体的な存在である。チャートの点数は、ブロック 1 が 101 点、ブロック 6 が 123 点となり、概ね近い数となる。

本論では、サヌカイトとチャートの石材利用の差異を検討することを目的とするが、ブロック 3 のチャートの点数は零細であり、分析に耐えないと判断される。このため、以下ではブロック 1 とブロック 6 の石材利用について検討を進めることとする。

第 1 表はブロック 1 とブロック 6 の碎片を除く器種組成をサヌカイトとチャートに分けて示したものである。いずれも製品はナイフ形石器が主となることが分かる。あえて言えばノッチが一定量含まれるが、いずれも加工は低調で、ノッチを最終目標とした剥片剥離が行われたとは考えにくい。このことから、剥片剥離が目指したものは、多くの場合ナイフ形石器の素材であったと考えることができる。

ここで留意しなくてはならないのは、剥片剥離の最終段階においては、二次加工ある剥片や微細剥離痕ある剥片といった便宜的に使用される剥片の剥離が行われた可能性がある点である。こうした便利的な石器は石器製作の中で生じた目的剥片とはならなかった剥片



第 1 図 ブロック 1・3・6 の石材組成

から選別されるのが通例であったと考えられる。だが、石核の消費が進みナイフ形石器の素材の獲得が困難となった石核を使用して、便宜的な石器に使用すべく剥片剥離が行われたことは想定しうる。遺跡に残される石核は、しばしばそういった石核消費の最終段階を示すものであり、意識しておかなくてはならない。

#### 4. 最大長のヒストグラム

ブロック 1 と 6 についてサヌカイトとチャートに分けて、それぞれの器種の最大長をヒストグラムで表したのが第 2・3 図である。階級幅は 5 mm とした。この作図にあたっては、報告書に掲載されている観察表を使用した。観察表で計測値が抜けているもののうち、報告書に図が掲載されているものは図から計測した値を使用した。また、実見により計測値を修正したところがある。碎片は全て計測値が記載されていなかったため除外することとした。

なお、ナイフ形石器については、使用・製作に伴い生じたと考えられる折れ片も出土しているが、それらを混ぜるとナイフ形石器の最大長の傾向の把握の妨げとなるため、もともとの最大長が推定できないものについては除外した。

剥片については、折れていない剥片と折れている剥片を区別して表示した。これは「剥片剥離時の目的」と「製品製作時の選択」の 2 つを区別して確認するためである。

「剥片剥離時の目的」は折れていない剥片から判断されるべきである。剥片剥離の際には 1 回の加撃ごとに意図した大きさの剥片を剥離しようと試みるだろうが、その大きさを捉えるには折れた剥片の大きさを含むと妨げになる。折れていない剥片だけを対象として、剥片剥離時に目的とした剥片の大きさの把握が可能である。

一方で、「製品製作時の選択」を考えるには折れた剥片を含めた全ての剥片を対象とする必要がある。製品を製作する際には、剥離された剥片全ての中から、製品に適したもののが選ばれることがあったと考えられ

る。ナイフ形石器の場合でもその剥片が折れているかは問題ではなく、大きさなどの要件がそろっていれば素材として選択されただろう。便宜的な石器には、剥離後に放置していた残滓の中から適当なものが選び出されることもあったと推察される。

とはいって、折れていない剥片の最大長の傾向は、剥片全体の最大長の傾向と一致するように見受けられる。剥片全体の中で、折れていない剥片は最大長が大きいもので割合が多く、小さくなると割合が減じるようである。そのピークも大きく異なることはない。

#### 5. 粟生間谷遺跡ブロック 1 の石材利用

ブロック 1 の碎片を除く石器は、チャートがサヌカイトより若干多い（第 1 図）。

まず、第 2 図でその傾向を把握する。ナイフ形石器は折れており最大長が推定できないものが多く、第 2 図に反映されているものは少ない。サヌカイトのナイフ形石器は 21 mm のもの（第 4 図 1）が 1 点表示されているのみである。折れており最大長が推定できないものでも、それを大きく超えるものは無さそうである。チャートのナイフ形石器は 15~25 mm の階級幅に分布する。折れたナイフ形石器には現存長で 27 mm のもの（第 4 図 5）があるが、復元しても 30 mm 程度までの大きさであったと考えられる。ナイフ形石器はサヌカイト、チャートとともに 30 mm 程度までの中形のものであったと考えられる。なお、ナイフ形石器の素材は不定形な剥片が主であり、サヌカイトには横長の剥片も用いられる。チャートには縦長の剥片を素材としたもの（第 4 図 5）もあるが、少数である。

剥片については、サヌカイトの最大値は 47 mm である。剥片全体のピークは 10~15 mm、中央値は 18 mm となり、折れていない剥片のピークは 15~20 mm、中央値は 19.5 mm となる。チャートについては最大値が 45 mm である。ピークは 15~20 mm で、中央値は剥片全体が 20 mm、折れていない剥片が 21 mm となる。チャートについては、剥片より大きい二次加工ある剥片があり、元々はその程度の大きさ

第 1 表 ブロック 1・6 の器種組成

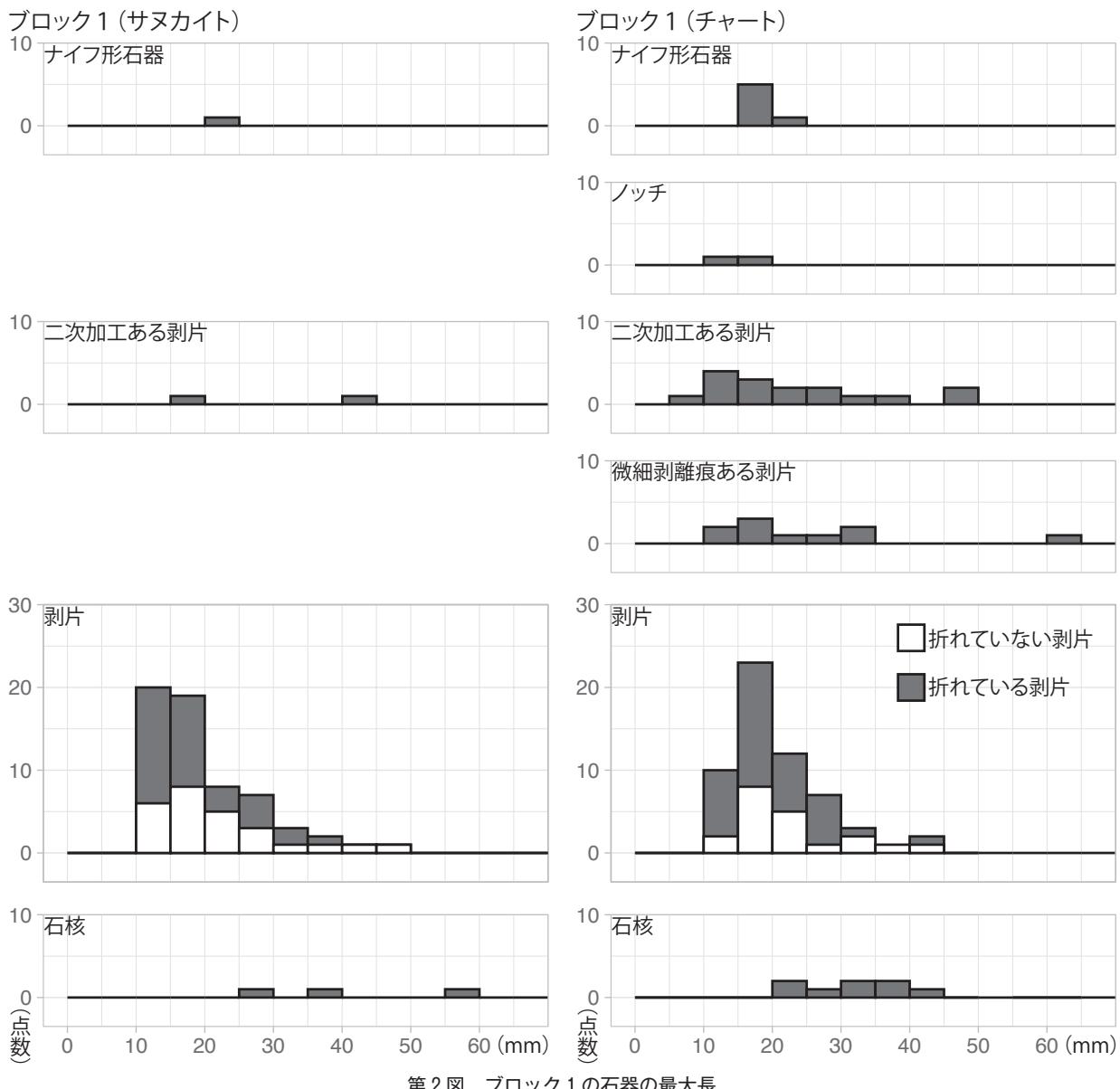
	ナイフ形 石器	角錐状 石器	円形搔器	ノッチ	二次加工 ある剥片	微細剥離痕 ある剥片	剥片	石核	楔形石器	合計
ブロック 1	サヌカイト チャート	4 10				2 16	61 10	3 55		70 101
ブロック 6	サヌカイト チャート	32 6	1	1	33	5	225 16	15 71	1	314 123

の剥片までが剥離され、便宜的な石器に使用されたと考えられる。飛び抜けて大きい 62 mm の微細剥離痕ある剥片（第 4 図 7）までが遺跡内で剥離されたものかどうかは不明である。サヌカイトとチャートの剥片を比較すると、サヌカイトに小さいものが多い傾向がある。これは剥片剥離の最終段階で粟生間谷遺跡を訪れたことによるものだろう。とはいっても、ナイフ形石器の大きさを含めて、サヌカイトとチャートの大きさに大きな違いは認められない。

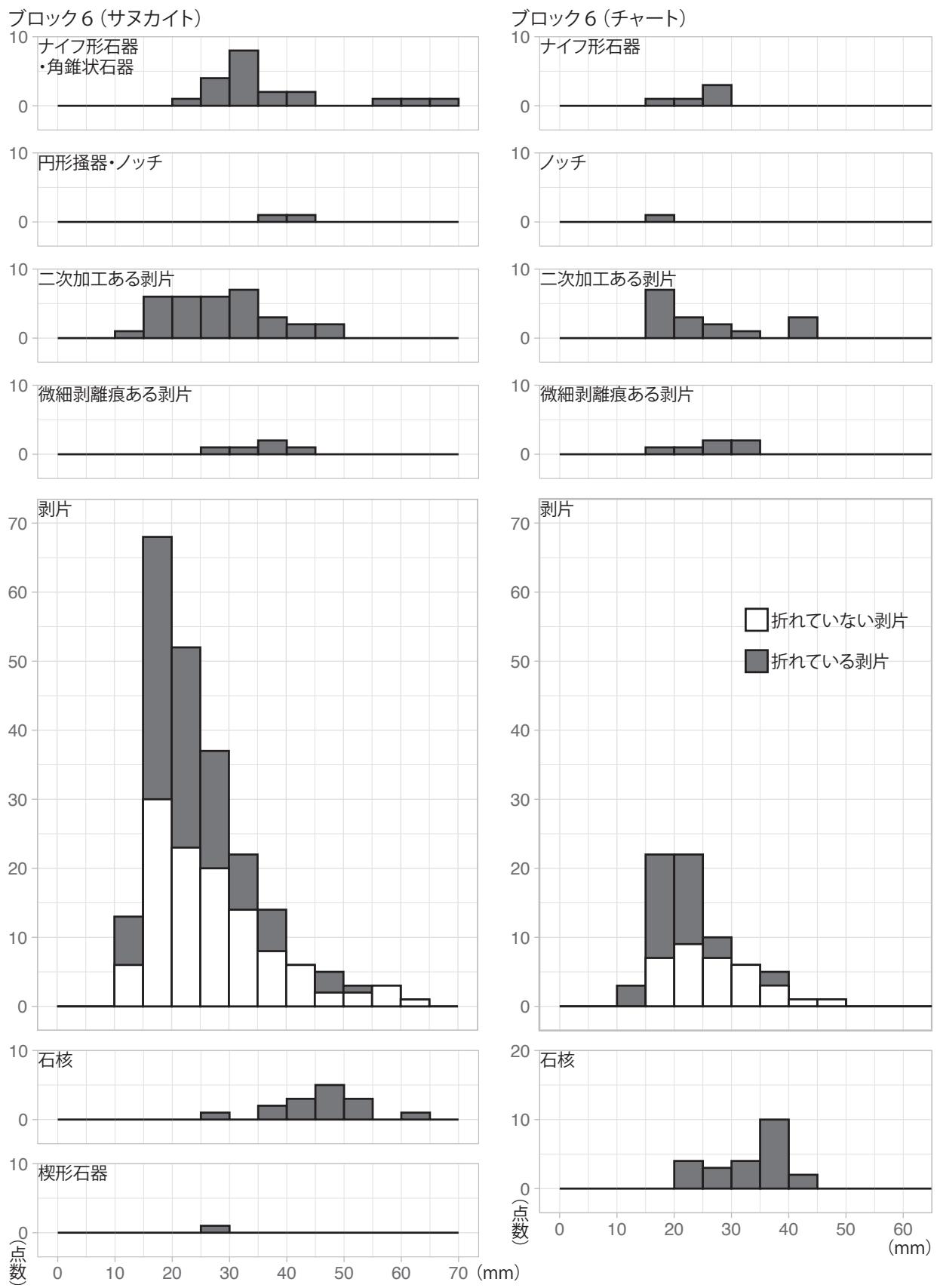
次いで石核について確認する。サヌカイトの石核は 3 点ある。いずれも剥片素材であり、特に第 4 図 4 はナイフ形石器の素材となりうる大きさの剥片と接合しており、剥片剥離の方法が、剥片素材の石核に拠っていたことを示す。なお、石核のうち最も薄い 7 mm (第

4 図 4) より厚い剥片（例えば第 4 図 2）については、石核素材となる剥片の剥離段階に生じたものである可能性が考えられる。チャートの石核は 8 点ある。剥離が進行し、判断が付きづらいものが多いが、分割礫を用いたものを含みつつ、剥片を素材とするものが主となる。剥片素材の石核のうち最も薄い第 4 図 6 が 9 mm であり、それよりも厚い剥片（例えば第 4 図 8）は石核の素材となる剥片の剥離段階に生じたものである可能性がある。

ブロック 1 の石器製作についてまとめると、ナイフ形石器、剥片、石核とともにサヌカイトとチャートの差異が少ないことがうかがえる。サヌカイトの剥片の中央値の低さからうかがえるように、サヌカイトが比較的乏しくなっている状況であったと考えられるが、大

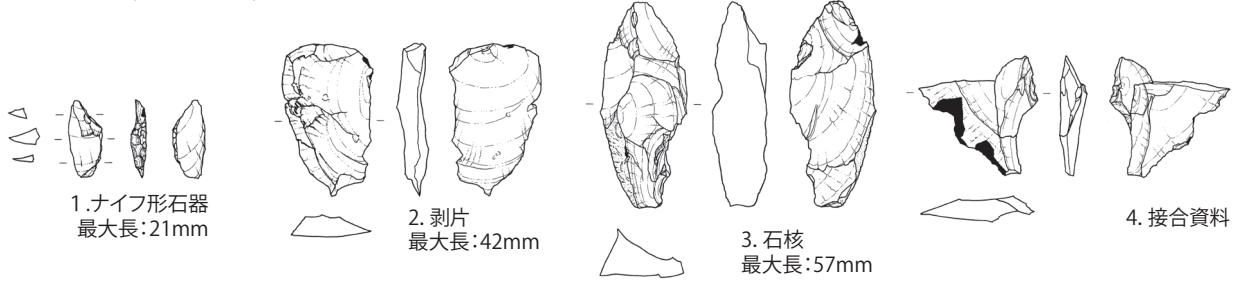


第 2 図 ブロック 1 の石器の最大長

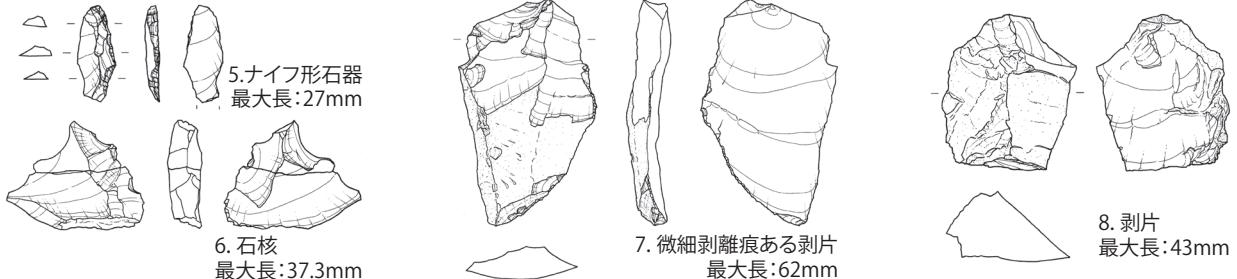


第3図 ブロック6の石器の最大長

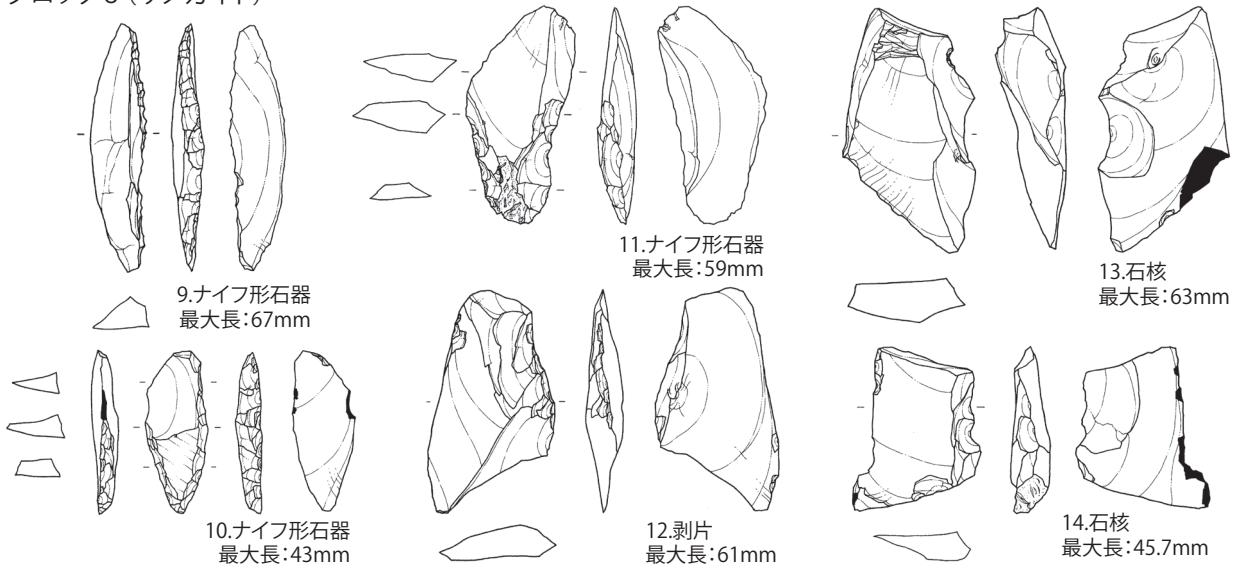
ブロック 1 (サヌカイト)



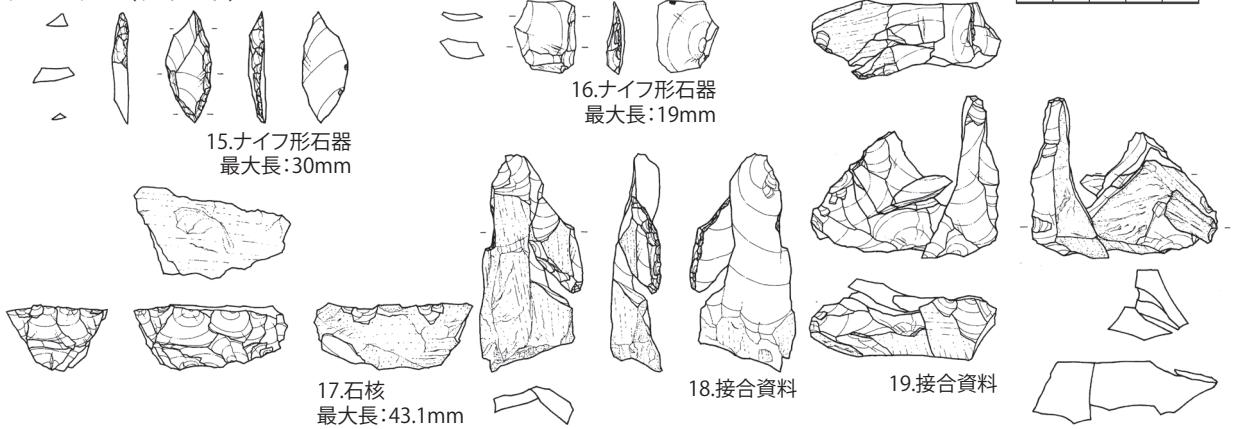
ブロック 1 (チャート)



ブロック 6 (サヌカイト)



ブロック 6 (チャート)



0 (S=1/2) 50mm

第4図 ブロック 1・6 の石器 (図は新海編 2003 より)

きく技術を変えることなくチャートによる石器製作に移り変わっているものと捉えられる。これは森先が示した石器群のI類の特徴（森先2004）と合致する。

## 6. 粟生間谷遺跡ブロック6の石材利用

ブロック6の碎片を除く石器は、サヌカイトが主体となり、チャートの利用は客体的である（第1図）。

まず、第3図からナイフ形石器の最大長を検討する。サヌカイトのナイフ形石器は最大値が67mm（第4図9）となり、大きいものを一定量含む。45~55mmの階級幅には分布が認められず、45mm以下のものとは性格を異にする可能性がある。大型のものについては、遺跡外で製作されて持ち込まれた可能性も想定すべきだろう。国府型ナイフ形石器（第4図9）とともに、翼状剥片石核かと考えられる石核をナイフ形石器に転用したもの（第4図11）が含まれており、国府石器群の痕跡が断片的に認められる。ピークは30~35mmにある。一方、チャートのナイフ形石器は30mm（第4図15）が最大となっており、サヌカイトと比べて小さい。サヌカイトのナイフ形石器の最も小さい範囲にあたり、その範囲のみを補助していたと考えられる。

剥片については、サヌカイトは最大値が61mm（第4図12）である。ピークは15~20mmで、中央値は剥片全体が23mm、折れていない剥片が25mmとなる。ナイフ形石器と比べると、大型の一群の範囲まではカバーできておらず、大型のナイフ形石器が搬入による可能性を示唆する。チャートは最大値が46mm（第4図19に接合している石刃）である。ただし、接合して59.5mmとなる石刃（第4図18）も確認されており、その程度までは少ないながら剥片が存在した可能性はある。剥片全体のピークは15~25mm、中央値は22mmとなり、折れていない剥片のピークは20~25mm、中央値は26.5mmとなる。チャートは20mm以下の比較的小さい剥片が少ないが、原因は不明である。サヌカイトと比べると、チャートの最大長は小さく、ナイフ形石器の最大長と連動するようである。

石核については、サヌカイトは15点ある。多くが剥片を素材とすると考えられる。剥片の腹面から剥片剥離を開始し、場合によっては求心状に、さらにそれが両面に及ぶような剥離の順序となるものが多い。剥片素材の石核で最も薄い10.7mm（第4図14）より厚い剥片については、石核素材となる剥片の剥離段階に生じたものである可能性がある。チャートは23点あり、剥離が進んで判断が難しいものがあるが、分割礫を用いるものが主体となる。サヌカイトに大きい石核が多

く、チャートは小さいものが多い。剥片の大きさと連動するように見受けられる。

なお、サヌカイト・チャートともに剥片の中には石刃と考えられるものを含んでいる。連続的にどれだけ剥離が行われたかは分からぬが、第4図18の接合資料からはナイフ形石器の素材も提供したことがうかがわれる。第4図19では、小口面で石刃の剥離が行われるが、その後の剥片剥離が進行する中で、その痕跡は失われ、石核には石刃を剥離したと判断できる痕跡は残されていない。そうした状況がほかの一部の石核では生じている可能性がある。

ブロック6の石器製作についてまとめると、ナイフ形石器、剥片、石核とともにサヌカイトとチャートの石材利用の差が大きい。サヌカイトの石器全体の小さい部分を補助する形でチャートは用いられており、石核の使い方も異なっている。チャートはサヌカイトの代替石材とは見なされておらず、役割を異なるものと認識されていたと考えられる。

## 7. ブロック1・6の石材利用の差異とその評価

以上で確認したように、ブロック1とブロック6では、同じくらいの数のチャートが用いられているにもかかわらず、そのあり方は大きく異なることが明らかになった。

ブロック1ではサヌカイトと大きく変わらない方法で剥片剥離が行われ、サヌカイトで製作する製品全体を代替するようにチャートが用いられている。一方、ブロック6では、剥片剥離の方法自体がサヌカイトと異なっており、製品もサヌカイトで製作されるナイフ形石器の最も小さい部分を貯っているに過ぎないことが分かった。

同じ遺跡内で、おそらく周辺の石材の分布にも大きな違いがなかったと考えられるブロック1とブロック6で、これほど石器製作が異なっている要因は、時間的な差異とそれに伴う技術構造の違いと考えられる。ブロック6は縦年的な評価にすればあれども、角錐状石器とともに国府型ナイフ形石器を有しており、国府石器群に近い段階の石器群と考えて間違いないだろう。瀬戸内技法はサヌカイトと密接に結びつき、サヌカイトの消費に適した技術として成立している。瀬戸内技法は「石器製作工程の異所展開」（山口1991）と呼ばれる石材の運用に示されるように、広域の移動をサヌカイトの消費によって支えることを可能にした。ブロック6の様相は、こうした国府石器群に近い時期に、あくまでもサヌカイトを中心とした技術構造があり、そ

れに補助的にチャートが利用されたあり方を示している。

それに対して、ブロック 1 では石材で技術、製品に差異が少ない。石材利用がサヌカイト中心とはならない、国府石器群とは異なる段階の石器群と評価できる。ブロック 1 の石器製作は同一段階の剥片剥離で得られた剥片を製品あるいは石核の素材として段階的に消費していく後期旧石器時代前半期の隱岐産黒曜石の石材消費（森本 2016）に類似する。ブロック 1 については国府石器群に先行する段階とナイフ形石器の終末期に位置付ける考えが示されているが、ナイフ形石器終末期の石器群の剥片剥離技術が十分明らかにされていないこともあり、今回明らかになった石器製作技術に基づく編年的な位置付けの検討については今後の課題としたい。

### おわりに

本論では、2000 年代を中心とした石器石材研究の一つの到達点といえる「時期別石材組成グラフ」から、さらに検討を進める方法として、石器全点の最大長によるヒストグラムを用いることを提起した。それに基づき、栗生間谷遺跡のブロック 1 とブロック 6 を対比的に検討し、ブロック 1 はサヌカイトとチャートの石材利用に差が少なく、ブロック 6 はサヌカイトを主とし、チャートはその最も小さい部分を補助するに過ぎないことを示した。これは、ブロック 6 がサヌカイトへの依存を強めた国府石器群に近い時期のものであるためと考えた。

本論で検討できなかった課題も少なくない。ナイフ形石器、剥片、石核の厚さの関係については、剥片剥離技術の分析を補助しうる要素と考えらえるが、ここでは十分に検討できなかった。また、ブロック 3 はチャートの点数が少ないと本論では取り上げなかつたが、併せて検討することで栗生間谷遺跡の評価を深められると考えらえる。今後取り組むことができればと考えている。

矢野健一先生と最も深く関わったのは 2008~2010 年度の考古学研究会常任委員会でした。ともに、今は改組されて無くなった平和・歴史教育委員会に所属しており、熱のこもったメールをいただくこともあります。お世話になりました。今後のご活躍をお祈りいたします。

本論執筆にあたり、永野仁氏、笠栗拓氏のご協力の下、大阪府文化財センターには報告書掲載の観察表の

デジタルデータをご提供いただきました。栗生間谷遺跡の資料調査にあたって、大阪府教育庁文化財保護課、竹原信次氏のお世話になりました。また、稻田孝司先生には分析の方法と分析結果の解釈について有益なご助言をいただきました。記して感謝申し上げます。

### 参考文献

- 池谷信之・望月明彦 1998 「愛鷹山麓における石材組成の変遷」『静岡県考古学研究』No.30 静岡県考古学会
- 石井淳平 2020 「考古学のためのデータビジュアライゼーション」『デジタル技術による文化財情報の記録と利活用 2』奈良文化財研究所研究報告第 24 冊
- 伊藤栄二 2003 「近畿中央部における AT 上位石器群の編年的研究」『東海石器研究』第 1 号 東海石器研究会
- 及川穰・灘友佳 2018 「山陰・中国山地における後期旧石器時代の黒曜石利用」『隱岐産黒曜石の獲得と利用の研究』島根県古代文化センター研究論集第 19 集
- 絹川一徳 2013 「瀬戸内技法の成立と展開」『九州旧石器』第 17 号 九州旧石器文化研究会
- 久保弘幸 2014 「西日本後期旧石器文化の編年と瀬戸内技法」『旧石器考古学』79 旧石器文化談話会
- 佐藤良二・絹川一徳 2010 「近畿地方」『講座日本の考古学 1：旧石器時代（上）』青木書房
- 新海正博編 2003 『栗生間谷遺跡—旧石器・縄文時代編一』大阪府文化財センター
- 諏訪間順 2006 「相模野台地における黒曜石利用の変遷」『黒曜石文化研究』第 4 号 明治大学博物館
- 田村隆・国武貞克・吉野真如 2004 「旧石器時代石器石材写真集」『千葉県の歴史』資料編考古 4 千葉県藤野次史 2006 「中・四国地方、近畿地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年研究』同成社
- 藤野次史 2013 「中・四国地方における石器石材利用の時期別動向と地域性」『中・四国旧石器文化談話会 30 周年記念シンポジウム予稿集・資料集』
- 三好元樹 2014 「近畿・中四国における旧石器時代の年代と編年」『旧石器研究』第 10 号 日本旧石器学会
- 三好元樹 2024 「旧石器時代・縄文時代と民族学」『考古学研究会 70 周年記念誌 考古学の輪郭』
- 三好元樹（印刷中）「出土石器全点を対象とした素材選択性についての分析方法の検討—翠鳥園遺跡出土石器を対象に—」『待兼山考古学論集 IV』大阪大

学考古学研究室

望月明彦・池谷信之・小林克次・武藤由里 1994 「遺跡内における黒曜石製石器の原産地別分布について」  
『静岡県考古学研究』No.26 静岡県考古学会  
森川実 2011 「AT 降灰以降における横剥ぎナイフ形石器の変遷」『旧石器考古学』74 旧石器文化談話会  
森先一貴 2004 「大阪平野周辺における石器石材の利用行動—チャート石材から見た石材運用論の再検討—」『旧石器考古学』65 旧石器文化談話会  
森先一貴 2005 「国府石器群の成立」『待兼山考古学論

集』大阪大学考古学研究室

森先一貴 2010 『旧石器社会の構造的変化と地域適応』  
六一書房  
森本直人 2016 「後期旧石器時代前半期の隠岐産黒曜石利用の様相—岡山県野原遺跡群早風 A 地点・島根県原田遺跡を対象に—」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室 50 周年記念論文集・文集』  
山口卓也 1991 「近畿地方における旧石器時代遺跡の立地—遺跡立地の差と地域性の発生について—」  
『関西大学考古学等資料室紀要』第 8 号